高良興生院・森田療法関連資料保存会

ニュースレター

あるがまま

No.２１（臨時号）

２０２２年４月２０日発行

追悼・外口玉子先生

社会福祉法人かがやき会の初代理事長であられた外口玉子（とぐちたまこ）先生が、２０２２年３月１２日に、８４歳で亡くなられました。

外口先生は、日本の精神科看護の第一人者であり、実践者でありました。常に、病気や障害をもつ人に寄り添い、彼らと地域社会の中で共に歩まれました。

先生は、高良武久（こうらたけひさ）先生から寄贈された高良興生院（こうらこうせいいん）跡地に、精神障害者の就労支援の場「就労センター『街（まち）』」をつくられました。そして、その建物２階の図書資料室に「高良興生院・森田療法関連資料保存会」を設立し、関連資料の展示や講演会の会場提供などを通して活動に協力し続けてくださいました。

高良武久先生から外口玉子先生に引き継がれた理念を私たちは大切に育み、多くの方にその理念を伝えていきたいと思います。

外口玉子先生の生前のご功績に敬意を表しますとともに、高良興生院・森田療法関連資料保存会への多大なるお力添えに、改めて感謝申し上げたいと存じます。

ここに謹んで外口玉子先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

高良興生院・森田療法関連資料保存会

【外口玉子先生　略歴】

前・社会福祉法人かがやき会理事長、地域ケア福祉研究所所長。保健学博士。

千葉県出身。1960 年、東京大学医学部衛生看護学科卒業後、東京都保健所保健師、国立病院看護師、東京大学助手を経て、1968 年、国立武蔵療養所看護婦長に就任。 翌 1969 年に渡米し、ボストン大学大学院に留学し理学修士。

1973 年、東京都精神医学総合研究所主任研究員。1986 年、精神障害者の社会参加と地域での生活を支援する「地域ケア福祉センター」を有志で立ちあげ、1989 年、「社会福祉法人かがやき会」を設立。その間、大学教員、衆議院議員を務める。

著書『人と場をつなぐケア』（1988、医学書院）、共著『精神科看護の展開』（1967、医学書院）、『問われ、問いつづける看護』（1977、星和書店）、『“困りごと”からケアは始まる－実践からの学びを支えるスーパービジョン』（2008、ゆう書房）、共編著『らい看護から』（1980、日本看護協会出版会）他多数。近著に、『外口玉子の仕事世界六十年』（2022、看護の科学新社）

外口玉子先生を偲んで

高良興生院・森田療法関連資料保存会　前会長　**増野　肇**

外口先生が亡くなられた。
今、就労センター『街』での数々の思い出がよみがえる。
あの、高良興生院の桜の木を活かして明るい感じに『街』がしあがった時に、外口さんでなければこんな感じにならなかったと思った。本当に生まれ変わったように桜の木が活かされた。
外口さんは、そんなセンスを持っておられた。

私が、栃木県の精神衛生センターの所長時代に、社会党のマドンナの代表として、以前から注目していた外口玉子さんを講師として招いたことがあった。その時、私は、サイコドラマで知られたザーカ・モレノ女史の下でサイコドラマを学んでいる時だったので、高田馬場で外口さんが経営していたケアセンターをお借りして、サイコドラマの拠点として利用することにした。
高良先生は９７歳になられ、興生院の閉院を決意され、病院の跡地活用の件で、外口さんを訪ねて来られた時、私は、たまたま、その場に居合わせた。外口さんのところにいくとは思ってもいなかったので、居合わせることができたのは、偶然としか言えない。
当時、慈恵医大への寄付の話も出ていたが、高良先生の娘さんの留美子さんが、高齢者施設に関わっていらしたこともあり、跡地の活用はトントン拍子に進んだ。

高良興生院の跡地に建った就労センター『街』の図書室の活用であるが、フロイトの自宅が記念館として保存されている。図書室を同じような施設にできないかと、私は、かねてから考えていた。外口さんからもお話があり、それは、現実の話になっていった。
協議を重ね、藤田千尋先生を会長に、「高良武久・森田療法関連資料保存会」として発足することとなった。事務局長を私が引き受けて、フロイトの診察室が記念館になったように、就労センター『街』の一角に高良先生の記念室を置くことになったのである。
そして、私は、『街』の貸しホールの常連として、サイコドラマ研究会を発足し、様々なサイコドラマの上映会をその場を借りて開催することになった。

尾辻泉さんのことが真っ先に思い出される。私の日本女子大の学生として、最初にサイコドラマの論文を書いた人である。就労センター『街』が職員を募集した時に彼女を紹介したが、惜しくも肝臓がんで亡くなった。いい学生だった。その時の同級生たちが今も彼女の活動を偲んで集まりを持っている。
また、私の家内が乳がんで亡くなった時に、記念の講演をソシオドラマで演じたものである。その時、元気に参加していた津田俊絵さんは、ボランティアでパソコンの指導をしていた。私の家内が亡くなった後もサイコドラマの研究会を絶えることがないように引き受けて実践しておられたが、私の家内と同じ病気で亡くなられた。

高良興生院で森田療法を学んでいた時に高良先生が行っていた「講話会」を真似して、現在、私は、就労センター『街』で、毎月第二水曜日に「水曜講話会」というトーク＆シェアの会を持っている。高良先生は、お話が上手く、聴いていて楽しかった。私がやっているトーク＆シェア

は、人の話を聴いてそれを広げていくのだが、これは、もしかしたら外口さんから教わったことなのかもしれない。
　最初は、ボランティアとして参加されていたが、その後、職員になられた足立さんも、ルーテル学院で私からサイコドラマを学んだ諸藤さんと一緒に、後を引き継いでやっている。
　また、ユーチューブで公開したタイトル「森田療法と出会えて」を作成し、改めて現在のサイコドラマは、森田療法とつながりがあることを見出した。

　これらのことが出来るのも外口さんとの出会いがあったからだ。

　こんなことを外口さんとお話したかったのに、私よりも若くして、あちらの世界に旅立たれてしまわれた。私も近く、そちらの世界に行きますから、その時は、外口さんの弟子として池田会館にいらした小松さんも交えてお話しましょう。楽しみにしています。

＊＊

外口玉子さんのこと

高良興生院・森田療法関連資料保存会　会長　　市川　光洋

　3 月 12 日に外口玉子さんが亡くなられた事を「街」の方から教えていただいた。訃報を受けた後、外口さんの人生と自分との関わりをもう一度手繰(たぐ)っていくと、色々な御縁があったのだと思う。

　外口さんは以前、都精研(東京都精神医学総合研究所)におられて、1989 年に退職されている。その頃、自分も浜松医大から松沢病院に移り、都精研にも所属していた。外口さんと同じ年に退職して成増厚生病院に移り、東京アルコール医療センター開設の仕事に関わった。センターでは、若い看護師達が新しい治療を始めることに熱心に取り組んでいた。彼らは仕事の後に、病院の外で精神科看護の「事例検討会」に参加していたが、この事例検討会を主催していたのが外口さんだった。
　翌年になり、休むことなくアルコール医療に専念していた彼らが、時々病棟からいなくなる日が出てきた。聞くと外口さんの「選挙運動」をしていると言う。「選挙期間中に限る」という約束をさせたが、彼らをこの気持ちにさせる外口玉子という人に、人を引き付ける力を強く感じた。
　その後、外口さんは国会議員を務めた後に在野に戻り、高田馬場で家を借りて患者さんと一緒に暮らし始めたと聞いた。当時東京アルコール医療センターも、アルコール医療専門のクリニックを高田馬場に開設していた。クリニックは駅の西側に近く、外口さんは駅の東側にいるという。電話して「お会いすることできるでしょうか」と尋ねるといつでも来て良いとの事であった。
　訪ねていくと、玄関に患者さんが出てきて、外口さんを呼んでくれた。玄関の傍の部屋にいると、現れた外口さんは想像したようなカリスマ的な人では無かった。1 人の人として患者さん達と一緒にいるのが本当に楽しそうであった。
　小さな部屋で話し込んだあと、また来ても良いかをお聞きすると「いつでもどうぞ」と言っていただいた。
　その後、何回かその部屋を訪ねては雑談をする機会があった。

30 年が経つ間に、下落合にあった高良興生院は無くなり、その跡地に外口さんは「街」を作った。高良興生院にあった木は「街」に残してくれた。今でも建物の一室を高良興生院の保存会に貸してもらっている。

ある日の雑談の中に、高良先生が 1 人で外口さんを訪ねて来た日の話があった。高良興生院の跡地をゆずるから外口さんが使ってくれないかとの申し出であった。「まさかと思った」話であったが、外口さんは、跡地に「街」を作る事を決心したという。高良先生らしいと思うし、また外口さんらしいと思うエピソードだった。

高良保存会の話もあった。高良興生院が無くなって長くなり、自分より年上の先生たちがほとんど引退されて、高良興生院の医師たちの同窓会的なものであった保存会はもう潮時かとの気持ちを外口さんに話した。外口さんは、「続けたほうがいいんじゃない」と静かに言った。

外口さんの関わった看護師さん達には、自分が関わった人達も多い。松沢病院で出会った宮本さん、末安さん、成増厚生病院のアルコール医療センターの中心だった藤原さんや韮沢さん達、皆個性的なメンバーであり、30 余年の間に皆年を重ねたが、彼らの患者さんとの関わり方にどこか外口さんのケアの色を感じる。

最後に外口さんと雑談をしたのは、夜の病院の外来でだったかと思う。

身内が帰国した晩に高熱を出したので、国立国際医療センターの夜間外来に付き添って行った。人気の少ない夜の病院の待合室で診療が終わるのを待っていると、同じ時に外口さんが隣の待合室で待っていた。外口さんも夜間の外来に施設の入居者の方に付き添って来ていたのだった。顔を見合わせて「奇遇ね」「本当に」と 2 人で小声で話し始めた。近況などを話しているうちに、それぞれの相手の診療が終わり別々に帰った。話しの中身は覚えていないが、夜中に 1 人で病気の方に付き添って病院に来ているのが外口さんらしく、印象に残っている。

30 年余の外口さんとの関わりであったが、亡くなられたとの実感はまだない。自分の心の中では、外口さんとのご縁はどこかでまだ続いているのだと思う。

＊＊＊

◆ニュースレター「あるがまま」№14（2019 年 4 月発行）に、『高良興生院と就労センター「街」』と題し、外口先生が寄稿されています。当保存会ホームページにもバックナンバーとして掲載されています。

（パスワード＝shimoochiai）

◆近著『**外口玉子の仕事世界六十年**』（2022 年、看護の科学新社）

［戦後、わが国の看護の歴史と伴走し、「場」づくりと人のつながりをとおしてケアの担い手として生きる。60 年にわたる、自らの仕事づくりの流儀を著した一冊。（単行本、346 頁）］

■編集／発行　高良興生院・森田療法関連資料保存会

◇連絡先　〒161-0032　東京都新宿区中落合 1－6－21　就労センター「街」内

☎03－3952－9975　ただし、火、水、木、金、土曜日の 10 時から 16 時まで。

◇電子メール　info@hozonkai.net　　**◇ホームページ**　http://www.hozonkai.net/